

けんかや葛藤のなかで育ち合う子どものかかわり

～子どもがみつめていく遊びの中で発生するけんかや葛藤の発達における意味を探る～

3才児・4才児・5才児(4期～14期の生活)の姿を通して

講師 岡崎 由美子

はじめに

わたしたちの幼稚園では、朝登園してきた子どもが「おはよーっ！」と部屋に駆け込んできたときから、「自分でみつけた遊び」の生活が始まり、一人ひとりがその遊びの中で様々な物語を展開していく。この一年間私は、保育の独自の立場から幼稚園のあらゆる場で、いろいろな年齢の子どもたちとかかわってきた。ある日のこと、まだ遊びがみつからない3才の男の子が記録版に目をつけ、「かいていい？」と尋ねた。「いいよ」と答え、「あのねー、これはねー、ぼくのかおなの」と言いながら何枚も描いてくれる。そして「はいっ！」と記録版を私に返すと元気よく走っていった。このように私の前をたくさんの子どもが立ち止まり、しばらくかかわっては駆けていった。自ら遊びを見つけていくということは、子どもにとっては並大抵の作業ではないようである。なぜなら、納得のいく遊びと出会うために子どもは、自分で自分の中のもう一人の自分と対話し模索しながら自らの遊びを見つけていこうと苦しんでいるかのようだからだ。

心理学者のゲゼルは、そのような子どもの状態を「子どもはジグザグに育っていくものである」と言っているが、それは子どもの織りなす遊びにも楽しく進むこともあれば悲しく立ち止まってしまう営みも待ち受けていることを述べている。

そこで本論では、3才～5才児の遊びの場の中で彼らが見せる様々な子ども同士のかかわりと、そこで出会った彼らのけんかや葛藤の場面に視点を当てて、一人ひとりの発達におけるそれらの意味を探っていきたいと考える。

仮 説

遊びの中で発生する様々なけんかや葛藤を体験し、それらを様々な人とかかわりながら乗り越えていく経験をした子どもたちは、自らの力で問題解決していく能力を発達させていくのではないか。

・研究の視点

実践事例から－＊遊びのなかで経験するけんかや葛藤の内容と個々にとっての意味

＊けんかや葛藤の中で育つこととは

＊かかわることとその中で育まれる力

・研究方法－観察記録

場面場面の子ども同士のやりとりや言葉をその場で、文章で記録する。

そして記録をもとに分析し、考察する。

3 才児

1、「本気」と「ごっこ」とのぶつかり合い

事例1. キャラクターとイメージの世界で対等にかかわりあう

もといちご組だったのははるおとこうたは、懐かしさのあまり古巣であるいちご組の部屋にやってきました。そして、この日も。

「いちごのくせにー」

「なんだー！ぼくたちはいちごだぞー」

「そうだー！いちごだぞー、ぼくたちのへやにはいるなー！」

「なんだー、ちっちゃいくせにー」

「ちっちゃくないぞー！もうーこんだけになったんだぞー」

お互いに勝手気ままに、自分の強さや大きさをアピールし合っていくいちごのよう、ゆうき、たかお達は、一生懸命に自分の指で3、4と示しながら負けまいと誇示していく。勢いにつられ、様子を見ていたこうじ、じん、たつみ、たろうも加勢してくる。

「ウルトラマン！」

「ガイヤー！」

加勢しにやってきた子どもたちは、あっというまに年中の二人に跳びかかっていった。まけてはならないと、はるおたちも手を出しにかかった。

「顔はだめだよー」

成りゆきを見守っていた保育者は、はるおたちが持っていた割り箸をテーブルに置いて戦うように伝えた。言われるがままに割り箸を置いた二人はいちご組の子どもたちと取っ組み合いをしていった。弾みで、カラー積木に引っかかって転んだこうじが大泣きしてしまった。

「がんばれー！」と、保育者はこうじを励ました。このとき、部屋に入ってきた担任が、泣き声にびっくりした様子でその場に走り寄って行き、こうじをすぐ抱き抱え、頭を擦った。こうじは一段と大きく泣き叫んだ。

「こうちゃん、泣いてる場合じゃーないよー」と、保育者は笑いながら言った。すると、その言葉に触発されたのか、担任の腕から離れたこうじは、仲間たちが走っていった廊下に向かって駆けていった。

考 察

・年中になったかっこよさと懐かしさもあったのか、年少の部屋に遊びに入ってきたはる

おとこうじは、思いもしなかった3才児なりの正義感に燃えたようやゆうきにつきまわられてしまった。自分たちだけの部屋に勝手に侵入してきた年中の二人を、不届き者とばかりに自分たちがもちあわせているすべての言葉や知識と、もてるだけの力と身体でその相手に立ち向かって行こうとするようやゆうき。自分たちの方が絶対と思っていたはるおとこうたは、早々と年中のそのような姿に尻込みしそうになりながらも、言葉の上では呼応しあい、対等な関係で戦っていこうとする。

この場面で面白いのは、年少のようやゆうきが「ウルトラマン」や「ガイヤ」に変身しながら戦いに挑んでいこうとしていることである。

そのように変身した「ごっこ」の年少に対して年中は、自分たちの方がどんなことがあっても負けるとは思っていなかったからこそ、「本気」で戦わなければならなくなった。また、保育者は大賑わいになった戦いの中でカラー積木につまずいて泣き、担任に抱き抱えられたこうじにさえも叱咤激励の声をかけていったことも戦いを「本気」にさせてよかったのではないか。そのことに対して、教育実習生がそのような保育者のあり様を背後で次のように記録し、考察していた。

*たろうと部屋に入ると、「ウルトラマン」、「ガイヤー」などといいながら年中にかかっていくいちごの子どもがいた。年中は本気の様子だが、いちごはなんだかごっこ遊びの延長という気がした。私はみていてハラハラする気持ちよりも「おー、やれやれー!!」と、いう気持ち大きく、いちごのたくましい姿に頼もしささえ感じた。

○先生→この状況を後押しされていた。しかし、年中の棒や、ゆうきが手にした椅子にたいして、止めるところはしっかり止めておられた。その止める声も決して大きな声ではなく、ふわーっと、聞こえるような口調と大きさで言われた。

—教育実習生／記録・考察(白根小百合)—原文のまま引用

事例2. 遊びの途中で突然おこるけんかやトラブルと保育者の留意

(1)けんかの中のがんばれ!

ようやゆうきがお互いの言い分を譲らないことが引きがねとなり手を出し合うけんかになっていった。こうきがようを押した瞬間、ようは突き飛ばされたようにして尻もちをついて転んでしまった。ようは唇を一文字にし、こうきを見上げた。

「ようちゃん!がんばれー!」

保育者は、思わずように声援を投げかけた。そのとき、その場でじーっとしていたようやゆうきの身体が勢いよく立ち上がると、ようは両手をこうきに突き出して立ち向かっていった。こうきもようの襟ぐりをわしずかみにして本気で戦っていった。二人がにらみ合ったその時、顔が緩み、二人の目が笑った。つかみ合った両手の力を抜いたようやゆうき。二人は

笑顔で自分の遊びをみつけた方へ向かっていった。

* ようとこうきが何らかの原因で言い争いになった。

こうきがようを突き飛ばした。私は近くで見ていた、すぐに止めようとした時、それを見ていたO先生が「ようちゃん、がんばれー」と行って、ように相手をするよう促していた。

* ようはこうきに突き飛ばされるが、されるがままになっていた。

そこで、O先生が一声かけたときは少し驚いた。でも、そこにはように立ち向かって行く勇気を持たせようという願いがあったのではないかと感じた。

ようも必死に抵抗し始め、真剣にぶつかりあう二人はきっとお互いに、何らかの満足感が得られたと思う。

手をだしたからと言ってすぐに止めず、ぶつかりあいをさせることも経験なんだなと感じた。

—教育実習生/記録・考察(杉谷聡子)—原文のまま引用

(2)だめはだめ!

ゆうきとたつみが小型積木で遊んでいた。突然にゆうきがたつみのほっぺたに手を伸ばした、と思ったとき、たつみのほっぺたはつままれたまま、二人の動きがストップした。

「ゆうちゃん! めー!」

保育者は急いで二人の場に行くと、ゆうきとたつみを離した。そして、たつみのほっぺたをさすった。

「ぼくはなにしてたんだろう?!」…そんな顔つきでゆうきを見つめているたつみ。

「ゆうちゃん、たっちゃんここ痛いよー!」

保育者はゆうきのほっぺたに触りながら訴えた。

* ゆうきがたつみのほっぺをつねる。

O先生が「ゆうちゃん、めーっ!!」と言って、ゆうきを離した。

そして、たつみに「痛かったねー、なでなでしとこう」とほっぺをさすり、たつみにも自分の手で擦らせた。

ゆうきに対してはダメということと、ゆうきのほっぺを触り、「たっちゃん、痛いよー、ここ」と、ゆうきに解からせようとしていた。

* 突然、大きな声で言われたので、はじめ何がなんだかわからなかった。

教師がしっかりと指導すべき点はあるということ。

そして、あとは教師が思いを受けとめ、子どもにたいしてどれだけ本気で関わるか、それをこの場面で見れたと思う。

—教育実習生/記録・考察(白根小百合)—原文のまま引用

考 察

(1), (2)のように、子どもがかかわり合っている場で、とりわけ年齢の低いほどこのようなトラブルは日常茶飯事とっていいくらいに起きている姿ではあるが、そこでそのとっさの見極めやそれをどう受けとめ対処していくか、を考え悩むのが保育者である。(2)の場面では、倒されたようが保育者の言葉かけによって、自分の心の中で本当はしてはいけないことだと思っていた相手に向かって行きたい気持ちを素直に表わしていったことに意味があった。なぜなら、①二人がその後、互いの目を見て「ぼくたち何してるんだらうー!？」と、思うように笑顔を向け合っていること。②自分の気持ちを素直に出し切っていくとしようとするようの人間のよさとしての負けん気をここに見ることができること。③自分の気持ちに尻込みをしないで自分のその場での存在感示すために、立ち向かっていけたという嬉しさがあること。④そのことがやがてよの自信につながっていくのではないか、ということが考えられるからである。

この場面後、子どもたちは、何事もなかったかのように遊びを楽しんでいたことを考えると、思いを行動に表わすけんかやトラブルも、周囲の者にとって『あわてることの少しもない遊びの通過点』だったといえるのではないかと考えることができる。

4 才 児

2、ささいなトラブルから発生するいざこざ

事例1 「いれてー」「だめー」の狭間に見られる気持ちの調整

昨日から続いていた女の子たちのお家ごっこが今日も朝から始まった。

部屋のボックス前に小型積木を一列にたくさん並べて、その囲いが家であり「おうちごっこ」になっていく。かこ、ゆきみ、まな、ゆうこ、まきのいつもの顔ぶれが揃い、それぞれが居心地良さそうに自分が陣取ったその場で、忙しそうに手をうごかしながら「ごっこ」らしい雰囲気をかもしだしていく。

「ねーねー、かこちゃんがいれてくれーん」と、さとこが保育者の顔を見上げるように、泣き声で訴えてきた。

①「いれてって、おねがいたの?!」

S「うん! いれてっていってもだめーっていうーの」

家の方へ顔をむけながら強い口調でまくしたてるさとこの横で、ゆうこも怒った顔を家の方へむけながらうなずいた。

①「じゃーねー、おままごとしたかったら、あの横でしたらどうかなー」

保育者の言葉に、さとことゆうこはますますふくれつつら顔で向こうの家をみながら呟いた。

…「だってー…、いくらいってもだめーって…」…

その時、家の中からまなが立ち上がると、しっかりした声で言い返した。

「かってにぬけたからよー」*（ここで担任が部屋に入り、この場面を保育者と笑顔で呼応しながら何が起きたのか見守っていく）

「じゃー、さそえばよかったのにー …」… 追い討ちをかけるように、かこは少し澄ました顔つきをし、ちょっと回りを気にしながら呟いた。～(気まずい沈黙)～

かこが積木の家をまたいで、さとこのほうへ歩いた。さとこの顔をのぞき込みながら「ごめんねっ…」と、小さな声で言った。かこの姿をみていたゆきみとまなもつられるように家からでると、ゆうこに「ごめんねっー」と言う。かこにつられて一緒に出てきたまきは どうしていいのか困った顔をしながらも、ゆっくりとそのやりとりを見守っていた。

事例2 泣いたもの勝ちの中で揺れ合う子どもたち

・遊戯室のテラス入り口ですすり泣きが聞こえてきた。「…?…」保育者は覗いて見た。遊戯室の中からは見えない場で輪を作り、さくら組の女の子たちが居心地悪そうな困惑したような顔でその場に立ちすくんでいた。

①「あらっ、どうしたのー?…」

「ゆこちゃん、ないてるの?」

保育者には先程からゆきが泣いているのがわかっていたが、少し大げさに声をかけた。しのが申し訳なさそうに保育者に顔を向けると口を開いた。

S「あのねー、ゆこちゃんねー、りなちゃんのしているのがしたいってー」

みんなの目が一斉に、りなの胸のあたりから巻き付けられているピンク色した暖かそうな布に注がれた。保育者も、りなの姿に改めて目を向けた。りなは困ったような、どうしようと言った顔をみんなに向けながら、渋々答えた。

R「あのねー、わたしがしているこれをねー、ゆこちゃんもしたいって言って、… …、
だけど、わたしもきょうがはじめてなんだもん…」…

りなは首をすくめながら、いつになく、しおらしく素直な気持ちを小さな声で打ち明けた。ゆこが涙でグシャグシャになった顔を覆っていた両手を外すと不安そうにりなを見た。

①「ねー、まちちゃん、まちちゃんだったらこんなときどうする?」

M「うーん!?!…」

保育者の横に立っていたまちは急に尋ねられ、戸惑いを笑顔で取り繕うと、みんなの方に首を傾げるようにして見た。

①「あらーっ! そう言えばあいちゃんはずっとこれをまいてるのに、今日はしなくてもいいの!?!」

Y「さっきまで巻いていたけど、しのちゃんがしたいって言ったからー、かわったの!」

①「そうかー、」

S「だからー、こんどわたしはー、りなちゃんにかわってあげたいのー …」

①「そうかー …」

①「うーんっ！ こまったねー」

… …

S「わたしもきょうはじめてだったんだもん …」

①「そうかー、しのちゃんもきょうがはじめてだったんだー」

S「うん！」と、しのは遠くを見つめる様な表情で、しかし、すっきりした顔で言った。

R「… …」

「かわってあげるー」

りなの表情は何かひたむきな麟とした姿を見せつけているようだった。

「はずしてー!？」と、保育者の前に立つと頭を垂れ、後ろ向きになったりな。

①「りなちゃん、いいの？」

R「うん、いい…」

ピンク色の布を取り外してもらったりなは自分の手でその布を泣き顔のゆこの身体に巻き付けていった。

ゆこの顔はたちまち明るくなり、その泣き顔は一瞬にして笑顔に変わった。なにごともしなかったように、いままでも、そしていまも、ずーっと自分が主人公のごとく楽しげに遊戯室に走りこんで行った。しの、さき、りな、あい、まちも次々とジャンプ台によじ登ると、まるで小鳥のように、両手を一斉に高く広げ順次に跳んで行った。

考 察

(1)事例1は、女の子たちの大好きな「おうちごっこ」の中でよく見られる場面であり、保育者としてもそれにどういうふうに対応したらいいのかとても迷い、悩むところである。「ねーねー、かこちゃんがいれてくれーん」と、さとこが訴えて来たとき、保育者が「あー そうなの」とすぐに呼応し、相手の方に「どうして、いれてあげないの？」と聞いたり、「一緒に入れて仲良くあそばさなくては」、と言ってしまうと、それは保育者が頼んだから「いれてあげよう」ということになってしまうのではないだろうか。この場で保育者は、さとこの訴えをしっかりと「受け止め」ようとする一方、さとこの表情をしっかりと「読み取る」とした。その一方で「課題提起」もしていった。「おままごとしたかったら、あの横でしたらどうかなー」と～

それでもこだわり続けるさとこことゆうこは、この先いつまでも自分たちが粘っていたらどうなるのかが解かっていたのだろうか。この場で保育者と担任の二人は事の成りゆきを見守っている。

それは、保育者と担任は、この子どもたちがいつもどんな様子、行動を取り合っているのか知っているからこそ、その場で互いに顔を見合わせ、笑顔で暗黙の了解を取り合いながら異なる位置で事の成りゆきを見守ることができたのである。

保育者の確かな見守りやゆるやかな支援もあって、子どもたち一人ひとりが自分の考えで、自分の態度、行動を顧みることができたことがとても大切なことであり、そこに発達の意味がある。

「ごめんねー」…と、かこが顔をのぞき込みながら相手に自分の気持ちを伝えていこうとする思いやりややさしさこそ、子ども相互のかかわりの中でとても大切なことである。

(2)事例2では、女の子6人がそれぞれ順番に布を巻き付けていく暗黙の了解が作ってあった。そういった中で、なかなか巡ってこないことを悟ったゆきこは、友だちを自分の方に振り向いてもらう方法として、自分で泣くことを選んだのだろうか。

一方、あの場にいた子どもたちは一枚の布を巻き付けることにどんな願いをもっていたのだろうか。いつもはあいが巻き付けている布をこの子どもたちは、何も思わずただ見ているだけだけだったのだろうか。おそらくこの布には、子どもたちにとって何か別の意味があるように思う。

とりあえず、ゆきこは泣き、一緒にいた子どもたちを立ち止まらせ、一人ひとりに今自分がこの時、何をしたらいいのか、どういう立場をとったらいいのかを考える場をもたせたということが出来る。このことは自分たちで問題解決していけるまたとないチャンスを生んだ。

事例の中で保育者は「そうかー …」「うーんっ！こまったねー」などと、子どもたちに言葉かけをしている。このことは「先生よりもあなたたちが、自分たちで答えをだし…」と問題をもう一度、子どもの方に投げかえして言った言葉であり、そのことを4才児は、この時期には充分できる能力を培ってきていると、判断したからである。

この日、はじめて布を巻き付けたしのが、しばらく遊んだ後、りなに代わっている。しのは本当はもっと巻き付けていたかったかもしれない。それでもかわってあげた。そして次のりなもぎりぎりまで自分の本当の気持ちと戦ったあげく「かわってあげるー」と申し出る。

りなにとってはつらく、悲しかったにちがいない。が、りなはその時、さっき自分に代わってくれたしの事を思い出していたのかもしれない。そうだとすると、布とそれを巻き付けることは、子どもにとって一つの思いやりのリレーとなつた可能性がある。このように子どもたちは、様々な思いをつなぐ経験をしながら自分の気持ちを自己調整することができていくのではなからうか。

このトラブルの後、子どもたちが見せた小鳥のようなジャンプに保育者は自分たちで問題を乗り越えた解放感、そして何か満たされたような満足感を垣間見たようであった。

5 才児

3、緊迫したかかわりが生む思いやりの心情

—年長の子どもの中から生じる対立・葛藤における環境の作用—

事例 1

(1)仲間はずれ／三角屋根の下で

「これを見つけたもんねー」と、こういちが三角屋根の上に向かって叫ぶ。仲間に見せつけるように、高く伸ばした手は棒のようなものを握っている。

三角屋根の中にいるはずの仲間はだれひとり振り向いてくれない。こういちには仕方なくうづくまって、砂を握って投げつけた。

「おーい！、やめろー！すなかけんなー！」

「こいつー、すなかけたでー」

けいの声にあわてたこういちが保育者と目が合うと照れくさそうに、落ちているえんぴつをあわてて握り地面に落書きを始めた。と、そのときなにを思ったのか、こういちが築山に駆け出していった。

「あっ！、にげたでー」

「おいっ！なんか、へんなことしちょーでー」と、たくがみんなに言った。

こういちはその言葉に答えるように「いっひっひーっ…」と、わざとらしい声を出しながら、みんなの後から三角屋根に上っていった。

「さらこなもーらいっ！」

まわりの雰囲気をも素早く感じ取ったこういちがみんなが関心をもっている言葉を叫んだ。

「ゆうぎょうかーどみーつけ！」

「ゆうぎょうかーど、みーつけっ」

「ゆうぎょうかーど、みーつけっ！」

「ゆうぎょうかーど… …」… 次々にはやしたてながら、けい、たく、みつぐ、みつひでの誰もみんな、この場に取りのこされないように走った。築山にたどりつくとすぐに「バンバンー…」と、元気な声を出し合いながら、自分の腕を鉄砲に見立てて戦いごっこが始まっていった。こういちはその場でふくれっつら顔をしながら、静かに仲間の姿を見つめていた。

(2)さまざまな感情を表出させ合うけんか／築山と赤土山へ

「おっ！さいあくだー」

「ねむりばくだんだー」

こういちの投げただんごがけいごの口にあたった。思いがけない攻撃にけいごは、ポーンとしながら大きな声で泣き出す。この姿をこういちがじーっと見つめている。

保育者が「うがいをしておいでー!!」と叫んだため、両手を下に広げ、つっぱって泣き立ちすくんでいたけいごは走って手洗い場へ。

K「ばーか、ばーか、あたってんだー!!」

けいごがすつきりした顔で走ってきた。再びだんご攻撃が始まった。

こういちが激しいだんご攻撃に腹を据えかねたのか、突然、手にしているスコップを相手の方目掛けて投げつけた。

「いけないよー!、それはいけないよー!!」と保育者は思わず叫んだ。スコップはみつひでの足下に落下した。回りにいた子どもたちもその場に立ちすくんでしまった。

①「拾ってきなさいー!」

M「いけないよー、あんなもの投げつけるとー、あぶないよー!!」我に返ったみつぐが大きな声で叫ぶ。こういちがスコップで砂をまき散らしていった。こういちに砂を投げかけられたみつひでは、こういちの頭をやさしくゲンコツでたたいた。こういちが肩をすぼめながらみつひでからのお返しを受けとめた。

みつぐが走り出すと、みつひで、けいご、けいも走り出す。つづいて、こういちが走っていく。

(3)はげしいけんかの後に待っていた思いやり／アスレチックの場

みつぐたちがネットの上で大の字になっていると、こういちが上がってきた。不満顔でみつぐたちを見下ろした。みつぐはそんなこういちの姿をじーっと見つめながら「いっしょにねるか!？」と、声をかけた。「うん」と、はにかんだ表情でこういちが答える。

M「いっしょに、こいっ!」と手招きしながら、

「ここにねるかー」

ネットを手で叩きながらこういちに話しかけていく。

K「ねー、こーういち、はいってるー?」

こういちの姿を見ていたけいごが、ネットから起き上がって誰ともなく聞いた。

M「ここのとなりでねていいぞー!!」と、こういちに言う。そしてけいの方を見て、

「はいらしてやったー」と、こともなく答えた。

… …

K「おいっ、こーういちー、ごめん!」

… …

C「ごめんなー」

「おれも、ごめん!…さっきはごめんなー」

… …

C「おれもー!」

こういちの口もとがほころび、安堵したやさしい目が変わっていった。

考 察

(1)こういち、いままでほとんどと言っていいくらい、自分が遊びの先頭を歩き、そこにいる振り向いてくれない仲間と行動を共にし遊びをリードしていたはずであった。しかし、その局面に変化が出てきた。その理由としては、こういちにいつも誘われるがままに後ろから歩いていた子どもたちも、その間にいろんな場でいろいろな友だちと出会い、そこでまた自分の五感を通じながら一人ひとりが自分なりの遊び方や交わり方、表現の仕方を身につけてきたことが考えられる。その過程が年長14期の頃になると子どもたち一人ひとりが、自分のしてきたこれまでの体験をもとに自らの力で自分の新しい世界を創っていこうとする時期にきているからと言えるのではないだろうか。

こういちは無視されてもなお、その場を立ち去ろうとはしなかった。何故だろうか。そこにまた、こういち自身の発達の意味があると考えられる。いままでのこういちならば嫌なこと、気に入らないことが生じると、友だちや物にその気持ちをぶつけ表わすことで解決をしていた。もしこの場からこういちが去っていったなら、三角屋根の中にいる仲間はどういう力をどのように受けとめたのだろうか。この場で悶々とする弱いこういちを仲間は、しっかりと感じ取ったことだろう。そしてこのことこそ、この後で展開する場ときっかけになっていく。

(2)場を移すきっかけはこういちが意を決して三角屋根に上がり、今までの自分を捨て、新たに今の自分を仲間にアピールしたことである。

こういちにとって、とても勇気のいる行動だったのではないだろうか。こういち一人だけではなく、人の中に入っていこうとする時、またここでは完全に無視されながら、疎外感を味わった上での自ら選んだ行動だった。そして次に待ち受けていたものは力による戦いだった。

「どろだんご」は年長児にとって、握りしめる小さな両手の平に自分の全神経を集中させ、愛情をこの上に注ぎながら「握ってにぎってのだんご」であり、まさしく「だんごは命」と言っても過言ではない遊びである。そのだんごを相手にぶつけ合う子どもたちの戦いは、自分たちのこれからの「命」がかかっているとさえ言えないだろうか。

2、けんかや葛藤の意味とかかわりとしての存在

(1)けんか・葛藤

ここで述べているけんかや葛藤は、子どもたちが日々の遊びの中でどうしても通過していかなければならない通過点（関所）のような役目をになっているものと言える。そして何よりもこのことの意味するのは子どもたちが遊びの中でいろんな人・物・事と出会い、そこで様々なかかわりをするからに他ならない。

*けんかとはあそび、力づくであらそうこと、なぐりあい、とあり時期におくれては効果がないことをいう。

*葛藤とはもつれ、紛争、もんちゃくー（心の中の）

—角川・国語辞典から引用—

(2)けんかや 葛藤に見る子どもの発達過程における時期の保育者の援助と役割

3才児の場合、上述の事例で考えていくと、その中で子どもたち一人ひとりが固有の発達を示していることがわかる。例えば3才児は相手に突き飛ばされたり、つねられたりした時、ことは、その瞬時に大変な事であって、その後何事もなかったように平気で遊びを続けていく姿が見られた。同じ3才児でもまだ自分の思ったことをすべて語っているわけがない。もちろん語れる子どももいるだろうが。

例えば事例2・(2)の中に、積木で遊んでいた子どもが突然相手のほっぺたをつねってしまう場面がある。保育者が「めー！」と言ったことで、その子どもは我に返り、「ぼくはなにしたんだろう?!」といった顔を向けることになる。相手の方も仕掛けた方を怒ることなく保育者に擦ってもらいその場を納得した感がある。すべてがこのようなことではないだろう。事例1では自分より大きい相手に平然と立ち向かっていく姿がある。3才児ならではの発想でとても愉快的微笑ましいけんかだと思う。年中を自分たちより強いと感じているからこそ、自分たちにとって一番強い者、あこがれの人（者）を自分に投射させながら対等に立ち向かっていこうとする健気さがある。3才児の取る最大なる知恵と勇気がここにある。

そのような3才児にとってどんな保育者の役割が必要となるのだろうか。教育実習生が考察で記している言葉を借りると、「手をだしたからからと言ってすぐ止めず、ぶつかり合いをさせることも経験なんだ…」「突き飛ばされ転んだ子どもが先生の声援で勇気をもたらした」とある。いま、その子どもにとって何が必要としているのか、保育者はその場で何を体験させたいのかを瞬時に感じ取りながら子どもの遊びを見守っていく重要なポイントが、そこにあることがわかる。

『4才児の場合』

この事例は偶然にも女の子の遊びの場面を捉えているが、二つの場面で共通することとして、まず事例1で、担任が部屋に入って笑顔で見守っている中で、「かってにぬけるからよー」「じゃー、さそえば（自分たちも）よかったのにー」と言いながらも、結局のところ誤る行動に出ていく。また事例2では、一人の女の子の泣く行為に回りの子どもたちが翻弄されながら、その涙に「かわってあげる」と取りなしていった。つまり、この時期の子どもたちはいろいろな体験をしてきたからこそ、涙や泣くことの行為がどんなものか、その場合にはどうしたらいいのかを我身を顧みることができたのだと考える。泣く涙をみてそれに降参した

のではないだろうか。きちんと相手の悪かったことを伝えることが言える子どももいれば、このように泣くことで自分の意志を相手に伝えなければならない子どももいるということ。そしてまた子どもたちはその状況をいかにすればその後の遊びもより楽しくできるかということについて考える術や、「知恵」を自分たちの中にもち合わせていくのだ、ということがいえる。

『5才児の場合』

①5才児は互いの自己主張をぶつけあいながら「言葉」「身体攻撃」「妥協」と自分たちが考える事や思い、要求を実現するためのあらゆる方法、手段を使っていったことがわかった。拒絶を繰り返すだけではなく、一人の人間として相手に真剣に立ち向かいながら、相手が自分たちに何を要求し求めているのか、そしてそのことに対して自分たち一人ひとりがどんな答えを見つけだしていったら一番いいのか、まさに事例では、そこにけんかや葛藤の開始、展開、終結の過程を見ることができる。開始では、仲間に入りたい要求をいろんな方法で探っていこうとする。どんなにつらく疎外感を味わろうともとても粘り強く食いついていこうとする自分の率直な気持ちを出している。展開・終結のところでは「スコップ」や「だんご」の場面で見ることができたように、自分の感情をコントロールしていく力、社会的ルールの存在を理解する力、互いの思いを調整し合う力などをそこにはっきりと読み取ることができた。保育の場面、子どもの遊びの場面ではこの事例のように偶発的な事が時として起こるが、保育者として常に子どもの気持ちや動きに呼吸を合わせていけるように遊びを見守るが、それが単なる見守りにならないよう配慮しなければならないことの一つであると考えている。

②危険なことに対しては毅然とした態度で立ち向かっていくことが大切となる。このことは保育者には当然のことであるが、子どもたち一人ひとりが遊びの中で身に付けて行くことでもある。そのことは、とりもなおさず子どもたちがたくさんの体験をしながら、そこで経験したことをどう受けとめ、どのように理解していくかと言うこととつながっていないだろうか。

事例1の中で、みつぐが「ここにねるかー」「このとなりでねていいぞー!!」と、こういちに伝える場面がある。こういちにとってそれはどんなに待っていた言葉だっただろうか。それはこういちの安堵したやさしい目や思いに汲み取ることができるのではないだろうか。

このように遊びの中には、子どもたちの生きる術や技のすべてが詰まっているといってもいいのではなかろうか。そしてその生きるための思いや表情、言葉や行動をどのように受けとめながら一人ひとりの子どもにとって意味のある援助ができるのか。5才児の子どもが大の字になって大空を見上げたその姿から、保育者は大きな答えを学んだ気がする。

このように子どもたちの遊びのなかで発生するけんかやトラブル・葛藤を保育者である私たちが、それをどのように捉えどのように援助していくか、によって子どもたち一人ひとりに与える発達の意味が大きく異なってくる。だからこそ子どもたちが何を考え、何を感じて

いるのかをしっかりと見極める心をもち理解していくことが大切ではないかと思う。

「命」をかけるこの子どもたちに何を言うべきだったろうか。保育者としてただただ子どもたちの次なる動きを見つめ、むしろ興味を注がれながら楽しませてもらっていた。当然、子どもたちは近くに保育者がいるということを感じていたと言える。お互いに安心して戦いをし合ったとも言える。しかし偶発的なことは起きる。こういちがスコップを投げたその一瞬を見ていた保育者も何もできない。言えるのはスコップが手を離れた時であったこと。見守る、見つめる、瞬時を捉えることのなんと危機一髪の狭間に私たち保育者はいることだろうか、と言うことを改めて考えさせられた。

危機一髪を身をもって感じ合った子どもたちがそこに立ちすくんでいたこと。保育者の本気の言葉をしっかりと受けとめ感じてくれたこと。「拾ってきなさい！」と言ったすぐ後を受け継ぐように「いけないよー、あんなものなげつけるとー、あぶないよー！！」と、みつぐが叫んだ時、誰一人身動きせず仲間のその言葉を身体で受けとめていこうとした子どもたちであった。

危機一髪を乗り越えたこういちと仲間たち。それでまた、砂をかけられたみつひでが今度はこういちにげんこつのお返しをしていく。この姿は互いのすべてを知っているからこそできる真に認め合う、許し合う気持ちではないだろうか。

この偶発的出来事は、お互いを向き合えさせる場を提供することとなっていった。

③子どもたち一人ひとりが今、互いにもち合わせているすべての力を出し切った後、何をどのように感じ合っていたのだろうか。アスレチックにたどり着いたみつぐはネットの上で大の字になると大空を見上げ、仲間たちもそこにねっ転がりながら、しばしの安らぎを得ている。

その姿は自分の中の、あるいはそれ以上の知恵と勇気、そして力を出しきったことへの子どもたち一人ひとりがもつことのできる最高の満足感だったのではないだろうか。

そして、そこに表れたこういちの姿に、仲間たち一人ひとりがすべて知り尽くし得た認め合い、許し合い、心情を共有し合う関係の言葉と考えることができる。

このように子どもたちは、様々な体験や経験をしたことを豊かな感情に移入し膨らましながら、今度はそれを相手に言葉をとおして、やさしさや思いとして伝えていこうとするのであろう。みつぐのこういちに掛けた言葉からも、そして誘発された仲間たちの言葉からも、この時を待っていたんだ、と言うこういちに対する思いが「おれも、ごめん！…さっきはごめんなー」と言った子どもたちの言葉の中に表わされていると感じた。

お わ り に

子どもたちは幼稚園に入園したその日から自分の中のもう一人の自分と対話し、時には戦いながら自分探しを始めなければならない。自分の遊びをみつけた子どもはとても安心することだろう。ところが見つからない子どもにとっては、もう一人の自分と向き合い戦うこと

になる。そこではすでに小さな胸にちいさな葛藤が生まれだしていく。保育者の見えないところで、その糸はいろんな絡み方をしていくのだろう。このように、人間として生きて行くと言うことは、その絡んだ糸をやさしく解きほぐしていくことに他ならないと考える。子どもたちは様々な体験や経験を何度もなんども繰り返しながら心情や態度、意欲を身につけていく。その中で相手の思いを汲み取りながら自分と相手との相互の調整をしていく能力も身につけていくことだろう。

けんかや葛藤に出会った時、そのときに子どもたちがどう立ち向かうか、この時をどう言う形で乗り越えていくのか、このような環境や条件の中で彼らは今以上の力と能力を身につけていくことは間違いないだろう。

また何よりもこのことを経験し乗り越えたときにこそ子どもたちに「おもいやり」の心が育っていくことが重要だと考える。そしてこのことは子どもが日々織りなす『見つける遊び』の中にこそ秘められ、そして生成していくということ。この何となく、見過ごしがちなささやかな遊びにも固有の発達過程があり、一つひとつがすべて意味を持つものとして抱えることが、保育者としての大切な役割ではないだろうか。最後にこれまでのべてきたことを集約したものとして倉橋惣三選集の中にある「育ての心」の次の文を引用しておわりたい。

—ひきつけられて—

子どもがいたずらをしている。その一生懸命さに引きつけられて、止めるのを忘れている人。気がついて止めてみたが、またすぐ始めた。そんなに面白いのか、なるほど、子どもとしてはさぞ面白かろうと、識らず識らず引きつけられて、ほほえみながら、叱るのを忘れている人。

実際的には直ぐに止めなければ困る。
教育的には素より叱らなければためにならぬ。
しかも、それよりも先ず、取り敢えず、子どもの今、その今の心もちに引きつけられる人である。

それだけでは教育になるまい。しかし、教育の前に、先ず子どもに引きつけられてこそ、子どもへ即くというものである。子どもにとってうれしい人とは、こういう先生をいうのであろう。側から見てもうれしい光景である。